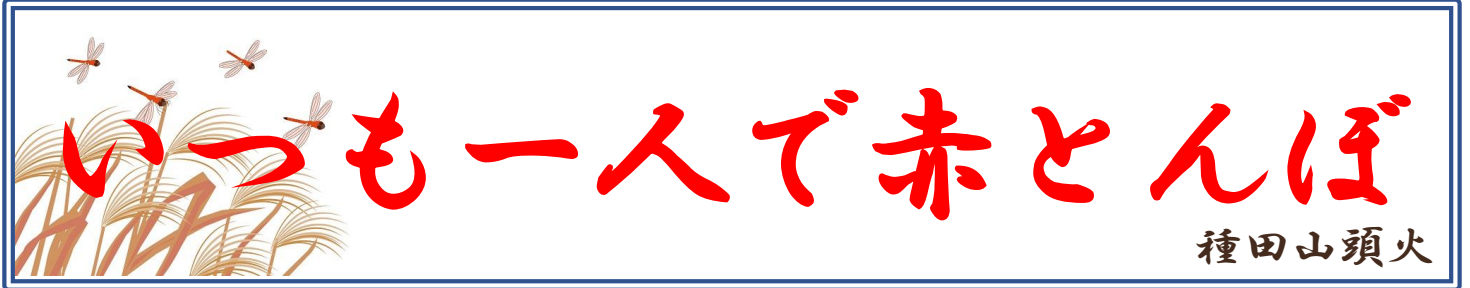


アトリエ 琉游舎 だより 88号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2020年9月23日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



- “いつも一人で赤とんぼ”これは自由律俳句を多数残した流浪の俳人、種田山頭火の句です。いつも群れで飛ぶ赤とんぼを、わたしはいつも独りぼっちで見ている。そんな孤独感寂寥感が表現された句と解釈すればよいのでしょうか。私の味わい方はちょっと違うのですが。
- トンボの群れは何処に行ってしまったのでしょうか。かつてはトンボの群れを見ると夏の暑さがピークを過ぎ季節が秋に向かっていていることを感じたものでした。透明な羽根の先端だけ茶色いトンボ（熨斗目トンボと呼ぶようです）や全身黒づくめの羽黒トンボ、ススキがとっても似合うアキアカネ（赤とんぼ）。いつでもどこでも簡単にトンボ採りができました。
- トンボの幼虫ヤゴの生育する水中の環境が悪化しているからでしょうか。そういえば蛍も見かけません。かつては田圃に水を供給する用水沿いには沢山の蛍の姿を見かけたものです。
- 水が汚染されると土が汚染され、土が汚染されると草木が汚染されます。そしてそれを食物とする虫や動物が汚染されます。もちろん動物の一種ヒトも汚染されます。水の汚染の結果がヤゴや蛍の減少だと言うことは分かっていますが、まさかそれがヒトの減少までは及ぶまいと人間は高を括っているかも知れませんが、実際日本の人口は減少しています。ヤゴと日本人の減少関係を仏教で言う「因縁生起」の必然の結果でしたとなっても後の祭りなのですが。
- 冒頭の句が山頭火の句と意識しなければ、いつも独り赤とんぼの群れの間をとぼとぼ歩む彼の寂寥感に満ちた姿ではなく、両手を大きく広げ群れと一体になった喜びの姿が私には見えてきます。自然は孤独や苦悩の相棒ではなく幸福をもたらす使者であって欲しい。私の願う人と自然の関係です。でもそれでは詩歌にならないかも知れませんが、作る人に叱られそうですが私自身は作るより味わう方に回った方がラクだし向いていそうです。読書の秋、芸術の秋、食欲の秋、収穫の秋、おしゃべりの秋。どうぞ琉游舎で秋をたっぷり味わって下さい。

写経会
10月4日(日)
13時半から

詩話会
10月10日(土)
13時半から

読書会
10月13日(火)
13時半から

居酒屋の会
9月25日(金)
16時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

9月26(土) 27(日)
休舎します

10/1 木	13時半	黄金(126分)	ハンフリー・ボガード主演。1920年代のメキシコ、革命の混乱はほぼ収まっていたが地方では山賊がはびこっていた。その中一獲千金を夢見て山脈の山中に金鉱を求めて旅立った三人。
10/8 木	13時半	汚名(101分)	ヒッチコック監督。ケーリー・グラント、イングリッド・バーグマン主演。父親が反逆罪となり売国奴の娘と呼ばれるアリシアのもとにFBI捜査官からある依頼が。
10/15 木	13時半	神の道化師、フランチェスコ(85分)	ロッセリーニ監督。フランチェスコと彼に従う使徒たちの物語。粗末な小屋で共同生活を送りながら、誤解と弾圧に屈せず如何に信仰を守り通したかが描かれる。
10/22 木	13時半	孤独な場所で(93分)	ハンフリー・ボガード主演。ハリウッドで起きた殺人事件を背景に、才能は天才的だが抑えきれない暴力的な衝動に苦悩する脚本家と元女優の若い女の破滅へと向かう壮絶な愛を描く。
10/29 木	13時半	断崖(99分)	ヒッチコック監督。ケーリー・グラント主演。夫に疑念を抱き始めた妻、不信任は日々増していき、夫に殺される被害妄想に取りつかれるようになってしまう。
11/5 木	13時半	大いなる別れ(100分)	ハンフリー・ボガード主演。親友ジョニーが殺され彼の過去を調査していたマードックは、彼が殺人罪で告発されていたことを知った。事件に巻き込まれる男を描くハードボイルド映画

今年も残暑というのにも憚られるような猛暑が9月になっても続いているため、秋冬用の野菜の種まきの時期を随分迷いました。早ければ虫に襲われ、遅ければ成長が遅れます。日記をめぐり、ネットで調べ、人に話を聞きながら蒔き時を計っていたといえは聞こえはいいのですが、実のところはお盆が過ぎて暑くて土を耕す気にならず怠けていただけとも言えます。結局昨年より1週間遅れで大根の種を蒔き、白菜の苗を植えました。と同時に昨年はさんざんバッタや芋虫にご馳走を提供したので不織布の防虫シートをかぶせました。双葉からやっと本葉が出始めた葉っぱは虫たちの大好物のようで、私にご馳走に預かるはるか前に彼らに食い尽くされてしまいかねないのです。さて私の畑に侵入できないと知った虫たちは何処へ行くのやら。

畑を始めて3年、よその畑が気になります。散歩や車で走っていてもつい畑に目が行き、一本仕立てだと実のなりがよくるんだ、雑草一つ生えていない綺麗な畑だな、日当たりがいいと成長が早くてうらやましい、などと”人の畑はよく見える“ことばかりです。ならばせせと雑草を取り、こまめに芽かきをすればよいのですが、夏の暑い盛りは熱中症になるから夕方からと思っているうちに夕立となる毎日。結局野菜も雑草も生長するに任せるばかりです。頭では分かっている、体がそれになかなか反応してくれない。初心者にありがちなことです。それでも自分の食べる分くらいは収穫できる素人の野菜作りは当分やめられません。

「たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。牛飼いが他人の牛を数えているように、かれは修行者の部類には入らない。」注1お釈迦様の語った言葉を集めた原始仏典の一つ「ダンマパダ（真理の言葉）」の一節です。「修行者」は難行苦行などの仏道修行をする者ではなく、法灯明の指し示す処へ自灯明を頼りに日々を行う人たちのことです。後は書かれている通りに受け取って下さい。講釈を垂れるだけで実行が伴わない者は行う人ではないと言われているのです。それは暑さにかまけて畑での作業を怠り、他人の牛を数えるようによその畑の実りを数えている私の姿です。原始仏典はすべて分かり易い喩えと言葉で書かれています。また恐らくお釈迦様が現実遭遇した場面に依じてその時、その人に対して説いた言葉だと思われるので、リアリティーがあり自分自身のことに引き替えて受け入れることができる言葉です。ですから私も素直にそのまま言葉を受け取ることができるのです。

原始仏典は後世の大乗仏典（法華経や般若経など日本で経と言えれば大乗仏典のことです）のように難解で誰かの講釈を通してでしか理解できないものではありません。この誰にでも受け入れられるお釈迦様の言葉が、仏教の繁栄に従って次第に難解な言葉になった理由を学者でない私が述べることはできませんが、日々を行う人である私には実感として分かります。先の引用した言葉をそのまま当てはめればよいのです。講釈を垂れるばかりで実行の伴わない僧侶たちはその正当化のためにお釈迦様の生の言葉を系統だて論理整合性がとれるように解釈をしてきたのです。一方お釈迦様の言葉に忠実であろうとした人たちは、講釈の前に実行すべきだと唱えました。これが大乗仏教（菩薩）運動です。仏教の原点回帰、原理運動です。しかし運動を言葉（経典）にした段階で解釈の必要性が出てきます。しかも今まである経典を全否定せずに古い経典の上に新しい説を付け加えて（加上説）注2大乗仏典が成立していますから、内容はますます複雑となり、誰か偉い人に説明してもらえないと、お釈迦様の言葉と称されるものを理解することが困難になってしまったのです。僧房の奥深くで解釈に専念する僧とそれを有り難く信じる私たちという構図が出来上がりました。

「教え」と「行」の分離です。僧は教えを説く人であなたちはそれを実行する人となれば、誰がその教えを実行するのでしょうか。それが自分自身の現世利益にならない限りはよほどのお人好しでもないかぎり誰も「行う」ことはないでしょう。これがお釈迦様の存命中から今に到るまで続く仏教の不都合な真実です。

お釈迦様の言葉を論理的整合性の中で一つの学説に仕立て上げてはいけません。彼は一人の人間としてある局面において臨機応変に人々の疑問や振る舞いについて答え語っただけです。その言葉が私にも思い当たるものであればそれを素直に受け入れればよいのです。解釈ではなくありのままに受け入れることです。彼の言葉を信じ日々の行いに励み、それが法の光に向かって着実に歩んでいると確信が持てたとき初めて言葉にできるのです。「はじめに行いありき」です。私は僧籍を持ち僧体をしています。ですから講釈と金銭を交換することが布施と考える現代の数多の僧侶たちと同じカテゴリーの中で見られます。そんな時私は「願い誓い行う」僧侶としての実践について話し始めますが、すぐに自分はなんという講釈を垂れているのだと気づき恥ずかしさを覚えます。どこまで行っても行いは行いでしか伝えられません。原始仏典に書かれた言葉は分かりやすく受け入れることは難しくありませんが、しかしそれを行うことがなければただ他人の牛や畑の実りの数を数えるだけの者です。行い続けることが唯一仏道の実践でありそれ以外に仏道はありません。

畑作りが私の行いの一つと話せば、何を大げさなと思われるかも知れませんが、私の行いは日々を楽しく豊かに心安らかに生きることにあります。種のまき時を悩み、暑さに鋤入れを躊躇し、虫の対処を考えることも、毎日を生活する喜びの一つです。ところで防虫シートをかけて一週間、私の畑に侵入を拒まれた虫たちの行先を心配する必要はありませんでした。不透明な不織布から覗くと白菜の葉に点々と虫食いの跡。これは虫たちの私への挑戦状？それとも居心地の良さに定住を願う姿？さて、シートの中から全員退去願うか、不法占拠を快く認めるか、強硬手段は使いたくないが、かといって一匹ずつ捕獲するも大変。今が思案のしどころです。でも「それもまた楽し」ですね。